六字尊像に就て

田中喜作

高野寶壽院に黑六字尊と呼べる奇異な像容の尊像一幅を藏する。六臂二足、慈眼を具へ、異獸冠を戴いて蓮花座上に立つが、其の姿相極めて珍らしく、隻脚は膝より屈して後に擧げ、たゞ左脚を以て直立する。而して六臂中眞手は定惠とも前に伸べて本尊特有の印を結び、次手は左に三叉戟、右に刀を把り、第三手は左に日輪、右に月輪を高く捧持する。像の下方壇上には獅子及び双狐を描く。又像身を周つて十二支頭を描出するが、其の樣宛ら雲中に現出するが如くである。又其の彩法を見るに、群青地に稍濃き同色を以て像身を彩し、綠青地の天衣と朱地の裙と、何れも其の色度深重ながら極めて單純な配合を選み、僅に下方の獅子の粉白身に朱と群青とを彩すると、双狐の一は朱、一は黃土なると、像の周邊の十二支頭に稍多彩を着けるに過ぎない。而して是等の各細部は何れも濃き墨線を以て描起するが、全幅特に泥描を賞用し、金と群青と綠青と朱と、何れも深重な色相が互に映發して、此の奇異な像容に益〻幽玄な一種の密敎的色彩を高潮して居る。其の相貌の稍冷かに、また全幅の描線の硬く形式化せるは、樣式より見て到底鎌倉末期以上に上すことは不可能であるが、保存の比較的完好なると、像の珍らしき遺物なるとは、觀者をして斯幅に一種の興味を覺えしめる。

本圖題して黑六字尊と呼ぶ。黑は儀軌に黑佛とあり、また靑黑色とあり、本圖また濃き群靑を以て彩するより出づるは明かであるが、そも〳〵六字尊とは果して何であらうか。

六字尊は六字天、六字明王等と稱へ、元、六字經法の本尊、卽ち六字神呪經、六字呪王經、六字陀羅尼經等、其他同系の六字經を所依の經典とするものと傳へられる。然し密宗に於ける多くの修法の本尊が、歷代阿闍梨の感見に因つて、時と共に其の像容に變化を來し、又原典の解釋を二三にし、或は外來思想の影響を容れて、當初の像容の如何なりしかをすら究め難きに至つて居るものが少くない。特に其の造顯の遺物の多く傳存しない本尊に於て然りである。此の六字尊の如きまた恐らく其の最も甚だしいものの一で、多數の先賢の圖像抄收むる所の像容を對照し、是れが遺記を併せ稽へて遂に本像の經軌すら明かにするを得ず、極まる所陰陽道に於ける七瀨の秡

と合して同じく六字法中に六字河臨法の發生をすら見るに至つて居る。

今先づ六字尊の造顯或は圖繪及び六字修法の跡を記錄に求めると、覺禪抄に勤修記を引いて、文德天皇御不豫に際し、貞觀僧正の修せること見え、此の修法の歷史の遠く平安初期に溯ることを示して居る。尙同記には仁和寺覺法法親王の奉仕、東北院に於ける仁海の勤修を錄し、また鳥羽院御祈に大敎院僧都覺意是れを修し、院より三尺の靑黑色木像の明王を渡されたると、美福門院御祈に當つて念範是の法を行ひ、聖觀音と共に六字曼荼羅を奉懸せる等を記する。是れを外にして尙ほ圖像抄に載する所二三に留まらないが、他の明徵ある記錄に求めるなら、中右記嘉保二年九月廿四日の裏書に堀河帝御藥御祈として五大尊一字金輪等多數の造顯中に

六字天王已上御等身

とあり、同記康和五年正月廿九日の條に皇子御祈として、また五大尊、普賢延命、摩利支天等の造顯と共に

六字明王各寸法不憶覺仍不記之也

とあり、同記長治二年三月卅日、天皇御不豫の條に佛師圓勢、院助等の廿二體の諸佛造立に伍して、また

六字金銅（マヽ）

の造立を錄する。また同記同年七月七日の條に

今夕於仁□（壽カ）殿被修始六字法、賢暹法師

とあり、山槐記治承二年六月廿八日中宮御產御祈の條に六字供を錄し、玉葉同年八月十九日の條に

中宮御產御祈御修法廿二壇可被行、是承曆例云々、全玄行六字法云々

とあり、また同書壽永三年四月三日の條に

余又爲祈等、六字供座主全玄

とある。而して鎌倉以降に至つても、尙多少の記錄を見るが、世相の變轉と共に、此の種の造佛修法の記錄漸く少きに至る。無論是れを以て直に六字尊信仰の衰退を想像することは出來ないが、然し中右記大治二年三月七日の條に

今日於法勝寺藥師堂有御佛供養、依催午時許參法勝寺藥師堂、南面安置丈六之六字明王七體、件佛像石見守資盛功云々

とあるが如きは、卽ち丈六の本像七體を造顯したもので、是れを以て是れを見れば、少くとも此の六字尊信仰の、藤原末期に於て熾烈であつたことが推せられる。

斯く文獻の上には本像の圖繪造顯の跡を辿ることは出來るが、而も此の法勝寺七體の丈六像の如きは云ふまでもなく、其の他當代の遺品として今に流傳するもの一も存せず、尙鎌倉以降に下るも、殆んど亡失して傳ふる所がない。唯、三寶院に絹本着色の六字經曼荼羅一幅がある。また鎌倉末期の作、其の像容は四頁所揭の圖樣に等しい。而して本誌所揭の寶壽院本の明王的圖像の如き、稍時下るが、寧ろ其の稀有なる遺品とすべきで、六字尊の當初の像容、特に彫像に於ける其れが果して如何なりしやも殆んど詳知することは出來ぬ。唯僅に先賢または圖像家の多數の遺記中に漸く五六を傳寫せると、併せて儀軌の說く所に依つて、此の珍奇なる本圖の圖樣の由つて來

る所を稽ふる外は無い。

覺禪抄所說に依れば六字尊は六字神呪經其他同系の六字經を所依經とするが、是等諸經の說く所を見ると何れも六字大明呪を說くに留まつて居る。卽ちたとへば六字呪王經を見るに、佛嘗て舍衞國祇陀林中に在りし時、一外道栴陀羅女の、尊者阿難を魅惑するを見、六字大明呪を說いて、人若し此の六字呪王經を誦持せば、能く一切の邪惡を脫却し、一切の衆難を免れ、以て百歲の壽を保つを得んことを說く。而して其他の六字經中には佛の說所を或は耆闍崛山、或は給孤獨園とするものはあるが、要するに大同にして、一も六字尊或は六字明王に就いて說く所無く、唯僅に觀世音の無邊の慈愍を點出するのみである。さればこそ先賢既に是れを疑ひ元海の厚造紙には

六字明王不知說所、故人多迷之、近來出來明王也、見莊嚴寶王經

と錄して近來奉崇の明王と推斷して居たのである。また前記中右記記す所の丈六七體の六字明王造顯に關する條に附記して云ふ。

此六字明王出自眞言敎歟如何、權僧正勝覺答云、此明王不出自顯密給、不知慥說、只近代本院令信給也、但本有六字經六字法、是六觀音也、然而於此明王者不出從彼經也、彌以不審、今日心閑奉見之處、丈六立像、其色紺靑、頂上件面現忿怒、有六臂二足、彼六臂捧日月幷劍鉾於二臂者作印也、大座邊作十二神也、像之爲體誠有恐云々、

と。言ふ意は此の日乘の筆者の疑問に答へて權僧正勝覺の、顯密兩宗孰れにも經軌無しと斷じ、また元、六字經六字法あるも是れ六觀音に係り、此の明王に至つては其の依る所を知らずと說くのである。

斯く藤末の遺記既に出典の不明なるを以て彌〻以て不審なりとする。今に至つて是れを闡明せんこと素より難い。唯こゝに說く所の像容は幸にも今日我々の有する寶壽院本に稍一致するが、然し所謂七體の丈六像と此の六臂二足像とは果して如何の關係を保つて藥師堂中に奉安されたのであらうか。或は寧ろ一體にて足るべき六字明王を何が故に七體までも造顯したのであらうか。

想ふに六字を冠するもの別に六字章句陀羅尼がある。請觀音經卽ち請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經に出で、觀世音禮拜の神呪と說く。斯經また六字經と稱するより、古く六字御讀經と稱するもの亦斯經に係り、此の修法を六字法と稱へた。而して是れに六字と云ひ、彼にまた六字と云ふも、たとへば六字文殊に於ける如く眞言文字の數に由つて是の名を立つるに非ざるより六字章句陀羅尼五十三字、また前揭諸六字經中說く所の神呪は、小は十五字、大は百字を數へる。古來諸說區々にして全く明徵を缺くが、今是れを要約せば、一は六を梵語の具足の義となし、一は六觀音の種子卽ち六字とする二說となる。是等の諸說は白寶口抄に說く所最も詳かである。今煩を避けて一々に擧げない。

元來此の六字章句を六觀音に依つて解釋すること、全く後の密宗學者の妄說なる事は、夙く既に釋淸潭氏が國華第百六十六號誌上に『六觀音と六字章句』と題して、具に論破せる所、我々また其の所說に傾聽する外はない。隨つて此の六字も具足の義と立つるを正しとせんかなれど、然し此の種の經軌に關する解釋は到底我々の任でなく、六の字義の如何は重要な問題ではない。

唯既に摩訶止觀の六音六道分配說に發して、是れに密宗義立の六觀音配當說を容れ、また別に非濁の三寶感應要略錄所收（大正新修大藏經第五十一卷八五三頁）の六觀音信仰の思想の如きが我に流傳し、而も是等が何れも六道思想との合一を證して居る所を見ると、觀音信仰と六道思想との熾烈であつた王朝時代に『佛は如意輪……千手、すべて六觀音云々』と首位に置いた枕草子も、また榮華物語に『六觀音は六道のために

別尊雜記所收　六字曼荼羅圖（大正新修大藏經圖像第三卷ヨリ）

おぼしめしたり。本誓を思ふにいとあはれなり』とて大悲千地獄、大悲正餓鬼以下の文を擧げたのも肯はれると共に、こゝに先づ觀宿、明仙兩傳の種字の六字曼陀羅を見るのである。卽ち厚造紙（大正新修大藏經七十八卷二六四頁）に

本尊六字觀世音、四大八大諸忿怒、六字法觀宿僧都明仙僧都有兩傳云々

とあるもの夫れで、何れも金輪を中臺とし、周圍に六觀音を配せるもの、たゞ觀宿傳に至つては、下に不動、大威德の兩明王を加へて、こゝに明に此の六字法の本尊に忿怒的色彩を加ふるに至つた。（此の曼荼羅兩圖に就いては祕抄卷七（大正新修大藏經七十八卷五一八頁）別尊雜記卷十一（大正新修大藏經圖像卷三ノ二、九二頁）等に見えて居る。唯、別尊雜記の明仙傳には貴布禰、須比賀津良等の呪咀神を加ふ。上圖參照）

是等の六觀音を中心とする六字法が果して何の時に起源するかは明かでないが、前記文德天皇御不豫に際しての修法の如き、恐らくまた此の請觀音經を所依經とするもので主として息災法として修せられたものであつたであらう。而して爾來明仙觀宿等の如き先德の感見に依つて、或はまた何等かの新渡の像容に由つて、忿怒形や呪咀神を加へて漸く六字神呪經以下の六字經に近づき、息災と共に調伏法としても嚴修せられるに至つたと解せられる。卽ち覺禪抄、美福門院御祈に念範の是れを修せる條に

天台大壇奉レ懸二聖觀音一護摩壇懸二六字天曼荼羅一云々

と云ひ、また

私云以二六字天一爲二本尊一偏調伏也小野廣澤說也、以二聖觀音一用二本尊一行二息災一醍醐說。

とあるもの、這般の消息を語るものなるべく、東台兩密各流に依つて、或は古義に從ひて古樣を追ひ、或は新義を立てゝ新樣に馳せて、六字天信仰の盛んであつた藤末時代に至つたものであらう。

然しこゝに六字天を以て本尊と爲すと云ふ。此の六字天が古樣の六觀音を中心とする六字曼荼羅と、果して如何の關係にあり、また如何の像容を爲して居たかは明かでないが、永延元年脊然の歸朝に

依つて新に將來された大乘莊嚴寶王經が、少くとも一の新な義立を結果したことが想像される。卽ち前記、厚造紙の六字明王の條に『近來出來明王也見莊嚴寶王經』とあるもの其れである。厚造紙所引、同經に云ふ。（大正新修大藏經第二十卷所收同經四卷（六一頁）にも同條があるが二三の文字の異同がある。今、圖像に關する記述を中心とするを以て特に厚造紙より引用する。）

此曼拏攞相、周圍四方各五肘量、中心安立無量壽、無量壽如來右邊安持大摩尼寶菩薩、於佛左邊安六字大明王、四臂肉色、日月色種種寶莊嚴、左手持蓮花、於蓮花上中安摩尼寶、左手持數珠、下二手結一切王印、於六字明王下安天人種種莊嚴云々

と。こゝに初めて六字大明王なるものが現はれるが、それすら此の經軌は、我々が今日寶壽院本に見る像容と一致しない。されば白寶口抄に云ふ。

此尊四臂、肉色白月色云々、持物相違、其色白色故非黑六字、諸師多以此經爲證據、不審也

と。然し釋淸潭氏の所說に依れば、西藏國に於て專ら六字神呪を崇信することあり、觀自在菩薩を禮拜する時に唱ふる神呪なる由（國華百六十六號二一七頁）であることを見ると、此の六字神呪崇信が、本來の西藏信仰に由來すると、或はまた同氏の所說の如く支那信仰の移入であるとは第二として、少くとも此の種の六字明王の像容が、當時既に何れかの國土に現出して六字神呪と共に禮拜の對象となつて居たのでないであらうか。それが必ずしも奇然が、彼の莊嚴寶王經と共に將來したと推定するまでもなく、當時何れよりか我が國に流傳して、こゝに古樣の六觀音を中心とする六字法に融合し、此の修法の本尊となつたものではないであらうか。若し今一歩を進めるなら、此の奇異な、寧ろ異國的な像容は、たとひ其の當初に於て支那本來の像容であるとしても、一たび西藏に入つて其處に一層西藏化し、再び支那を經て流傳した事もあり得るであらう。覺禪抄に云ふ

師云此像調伏怨家成就萬願形也、又六字天卽聖觀音變身也

と。說く所簡明、また這般の消息を語るものでないであらうか。其れが一も經軌に徵する所なきも亦止むを得ない。

斯くの如くにして六字明王は出現した。然しまだ其の流傳の當初の像容に關しては、不幸にして遺物と文獻と共に徵すべき無く、是れを仔細に究むることは難い。たとへば法勝寺藥師堂の丈六七體の像の如き、如上の推定から、六字明王を本尊とする六觀音像でなかつたかとは仄に想察されるが、然し同堂には落慶供養以來既に丈六の六觀音像が安置されて居た筈である。卽ち榮華物語鳥の舞、同堂供養の條に『六觀音同じく丈六にておはします』とある。或は此の大治の像は白河上皇の崇信の餘、故らに造顯されたものであらうか、或はまた當時既に不動、大威德を加へ、また若し大威德を部主と爲すものすらあつた（師口卷一。大正新修大藏經七十八卷八四一頁）とすれば、特殊な像容が彫刻的造顯となつたものであらうか。今自分は是等の點に就いて想察すべき由もない。況んや白寶口抄の三井經藏本の如き、實歸鈔の貞觀寺寶藏本の如き、また覺禪抄の叡山禪堂院本の如き尙更に知ることを得ないが、恐らく其處には尙異種の像容があつたであらう。たとへば本誌所收、井上源太氏藏、六字尊圖像の如き、また其の一と見る

ことが出來る。

本圖は横に四枚の楮紙を接合し、竪全長九〇、〇糎、横四五、六糎の一紙に淡墨もて、見るが如き圖像を描出したもので、今は裱背下に掩はれて居るが、紙背に『六字　遍智院』の五字の墨記がある。遍智院は云ふまでも無く醍醐の成賢の住院、嘗て斯院の什であつたものが、こゝに流傳したものと信ぜられる。其の白描の様式頗る醍醐の諸圖像に近く、描線輕く伸びて形式化に墮することなく、少くとも鎌倉中期を下らざるもの、殊にそれが遍智院本であつたこととと成賢其人の圖像の、今に傳ふるもの多く、而もそこにも様式的類似を多分に印せることは、或は成賢または其の周圍の一作品でないかと想像される。其の上遺品の少い本像にあつては、別尊雜記の如き圖像鈔所收のものを除いて、恐らく最古の圖像とすべく、偶、民間に流傳せるもまた珍とし得る。

今本圖の像容を寶壽院本に比するに、彼が同じく奇異の姿相を爲せるにも似ず、聖觀音の所變に應はしい慈眼を以て我々に對して居るにも拘らず、是れは三眼を具へて明かに明王的色彩を具現せると、一狐が足に箭をとると以外には、概ね本尊の像容を等しくする。然し上部頭光の周圍に廻らした六箇の種子は、抑何を象徴するものか。

其の中、上方の四字、向つて右より十一面、如意輪、正、准胝の四觀世音の種字に一致し、又下方の二字、左方は千手と見るを得、同じく六觀音ならんかと思はれるが、而も右方馬頭と見ることは多數の圖像鈔所收の曼荼羅に一も該當するもの無く、却つて不動明王の種子に一致する。然し斯く馬頭を除いた五觀音に不動一尊を加ふる六尊の結合は觀者をして先づ何よりも奇異の感を起させるが、千手と見得る左方のキリクがまた大威德の種子なることは、或は四觀世音二明王の結合として、特殊なる阿闍梨の感見に由來するものであらうか。

今我々が座右に披見することの出來る六字尊像は、純然たる種子曼荼羅を除いて、僅に別尊雜記收むる所三、圖像抄（高野圓通寺本）の二、覺禪抄の二及び本誌掲ぐる所の寶壽院本、井上家本の九圖に過ぎない。而も其の内二三種の重出を除いた六種の、全く圖様を異にするものであることは、軈てまた其處に尚異種の像の存在をも想像し得るものがあるであらう。

さるにても本誌所掲の二圖、何れも六臂具有の像、白寶口抄第四

六字尊像

東京　井上源太氏藏

十九卷大正新修大藏經圖像六ノ四、二六〇頁に

口云六臂者表六識、是六觀音六趣濟度義也云々

と云ひ。また

西院口云、身青黑色、六臂具足、左右第一結印、左第二三載 同第三日 右第二刀 同第三月 首戴蛇形、又有頭光、少向左方立赤蓮華、右足令屈膝、横付膝内云々

とある。而して寶壽院本は剝落して明かでないが、其冠は或は蛇形冠であらうか。井上家本に至つては猿冠頂戴の像、卽ち同書に

猿冠者表六識、觀音卽六識轉成尊故也云々

とある。また野狐を圖するに至つては、修法中野狐形を燒くことを載する以外に徵すべき明文を得ないが、何れは妖獸、若し强ひて經典に證を求むれば五分律に

野狐答言、我是獸王、應取汝女、與我者善、若不與我當滅汝國

とあるが如き、稍調伏法に應はしきを思はせるが、前後の關係に徵すれば、素より妖獸の憍慢自ら毀るを說けるもの、或はまた陰陽道の思想のこゝに影響するものかとも思はれる。斯道の星宿に心月狐の目あり、如意輪觀音を當てるが、今明に考へ難い。白寶口抄に云ふ。

聖賢闍梨云、大僧都御說、於六字法者偏外術也、就中黑色六臂、依白河院時、鳥羽僧正自三井經藏取被出云々、其前不流布、世人不知之、件像外術神云々、或云天台請來也、六字天外法像云々

と。また然らずとし難い。六字河臨法に就いては既に觸れた。

然して周邊十二支を加ふる如き、一面に六字神呪王經の既に

使某甲晝安夜安晝夜常安

の語あれば、二六時中一切厄難を護るの意と解し得ようが、而も藥師十二神將に於ける十二支配當が、また陰陽道の思想に出でゝ、藤原中期に起源することを思へば、斯く考へることを妥當とすべく、若し又別尊雜記、覺禪抄等に擧ぐる圖像の如く、周邊に陰陽道の封字を加記するに於て尙更であらう。而して箭は卽ち六字天の三形、黑六字尊の黑は妖色、また云ふを須ひない。

此の寶壽院の一本、藝術的價値に於ては素より高く評價し難く、野山多數の藏儲中此の種の位置を爭ひ得るもの甚だ多い。たゞ本像の遺品甚だ少きと、比較的保存の良好なるとより、こゝに本像を揭げ、併せて其の起源と變遷とを考へることとした。尙本像が古來密敎各流に於て或は息災に修し、またそれに應ずる多數の壇樣ありて、圖像家の遺記する所、各細部の義立と共に甚だ複雜多端なるものがあるが、其れ等は無論我が徒の云爲すべき問題でない。今はたゞ本像に卽することを以て任とする。